

## 大会実行委員会からのご挨拶

大会実行委員会委員長  
片山一義（札幌学院大学）

大学評価学会第13回全国大会は、2016年5月14日、15日の両日、北海道大学で開催されます。

これまで北海道は会員数が少ないこともあって、地域内の活動はほとんどありませんでした。それでも、当学会の設立以降、研究会を北海道の地で開催した経験は2回あります。最初は学会設立直後の2004年11月に開催された第11回月例研究会（北大農学部）であり、2回目は2006年9月開催の第3回秋の研究集会（札幌学院大）です。後者の研究集会は、全国規模の研究会で多数の参加がありましたが、最初の月例研究会は北海道に在住する設立メンバーの初顔合わせのようなものであり、参加人員はわずか5名（うち道外会員1名、会員外2名）程度だったと記憶しています。これらの研究会は、2006年秋の研究集会「社会(地域社会)に対する大学の役割(責任)をどう評価するか」のテーマに見られるように、「地域と大学」との関係を中心にするものでありました。最初の月例研究会も、北大の独法化問題に加え、「道内私大学生の生活・家計状況と大学経営をめぐる問題」など地域に根ざすテーマを取りあげてきました。こうした視点は、今回の全国大会のテーマ（「若者、地域とともに育つ大学－北海道から考える－」）にも引き継がれていると思います。

2000年以降本格化した新自由主義（市場原理主義）は、高等教育の分野においても大学の自治破壊、私大経営の危機と格差拡大、権利侵害など多様な問題を発生させましたが、それらが集中的に現れているのが地方です。特に、北海道はその典型と言えるでしょう。ここ3～4年、北海道の多くの大学では、大学ガバナンスの見直し、学群制の導入、大学・短大や学部の閉鎖などドラスチックに大学再編が進みました。そして、それに伴い整理解雇や人権侵害等の訴訟、不当労働行為救済など地労委提訴に至る労働事件も多発しています。

今回の全国大会は、こうした北海道の高等教育をめぐる現状を背景に開催されます。各分科会では、大学経営の問題に関連して、以上のような北海道の実情の一端も報告されるのではないかと思います。また地域において教育がどう進められているか、あるいは地域づくりにおける高大連携の在り方、地域の再生や再創造における大学の役割なども議論されるでしょう。これらは、新自由主義路線とは異なるもう一つの「地方創生」の有り様を考える機会ともなるでしょう。

大学関係者のみならず、高等学校の先生も含め、多数の方々の参加をお待ちしています。